Japan society of Home Economics

日本家政学会誌 Vol. 49 No. 1 77～87 (1998)

大学生の自室へのひきこもりに関与する住居および心理要因の検討

小 俣 謙 二

(名古屋文理短期大学)

原稿受付平成9年4月21日；原稿受理平成9年10月16日

Residential and Psychological Factors with Reference to Withdrawal into Bedroom in Japanese Students

Kenji OMATA

Nagoya Bunri College, Nishi-ku, Nagoya 451

The aim of this study is to clarify residential and psychological factors related to the Japanese students who tend to confine themselves in their own rooms. The questionnaire was answered by 268 students, 134 males and 134 females. The findings are as follows. Their tendency to withdraw to their rooms was not particularly strong, but some residential and psychological factors were ascertained to explain their withdrawal tendency. Two residential factors (density, number of equipment in a room) and two psychological ones (degree of self-identity, exclusive attitude) were identified to be related to the withdrawal by both sexes. Some differences, however, were found between male and female students. Furthermore, the female seemed more sensitive to the factors studied here. The mechanism of withdrawal must be further studied, but, in the meantime, the findings strongly suggest the necessity of empirical study on what their rooms mean to adolescents.

(Received April 21, 1997; Accepted in revised form October 16, 1997)

Keywords: withdrawal into bedroom ひきこもり, residential factors 住居要因, psychological factors 心理要因, students 学生, questionnaire アンケート調査.

1. 緒 言

わが国の住まいでは子供の個室が親の個室に対して優位にあることはよく知られている（山本と中島 1985；Omata；1992；小俣，1997）．このような子供の個室保有と子供の発達との関係については肯定・否定双方からの議論がなされてきた(*e.g.*, 外山 1985 a；山本と中島 1985；渡辺 1986；清家 1989)．そのなかでしばしば議論となったものの一つが，個室へのひきこもりの問題である（羽仁 1980；宮脇 1982)．

ひきこもりあるいは閉じこもりは，青年期の無気力症の進行した症状として，患者が家族との交流を拒否し，自室に滞在し続ける状態を記述する際（稲村 1989）や登校拒否児の不適応行動の一形態を記述する際（外山 1985 b，1989）のように，しばしば不適応行動というニュアンスを含んで使われる．しかし，住居の問題として使われる場合にはこのような極端な空間利用に限定されず，自室に滞在する傾向が強く家族空間への参加に対する消極的・否定的態度という，空間の非社会的利用という意味で用いられている．したがって，本研究ではひきこもりをそうした意味で用いる．そして，このような視点からひきこもりに関する住居学などの従来の研究をみると，若干の問題点が指摘できる．

たとえば，竹下（1986）はプライベイティズムの用語でひきこもりを問題としたが，そこではひきこもりは「自室での在室時間の増加やそこでの行為の増加」として測定されている．しかしこの定義には二つの問題点がある．ひとつはひきこもり現象を在室時間や利用行為数で捉える定義では子供の発達的変化による行動の質的変化がほとんど考慮されていないという問題である（北浦 1989)．たとえば，子供は発達とともに自分自身の場を必要とし（北浦 1970； Hildreth and

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

Hoyt 1981；外山 1989)，その空間は内省空間の確保という意味で自我発達や精神的安定の確保などに肯定的に作用すると考えられる（北浦等 1985；小俣 1995, 1997)．同様に，個室をなわばり空間とみなすならば，その確保は自己同一性の形成や主婦の精神的安定に寄与すると考えられる（Becker and Coniglio 1975；Brown 1987；Omata 1995a, b)．とくに，自我や自己同一性の確立期である思春期・青年期（*e.g.*, Erikson 1959）では，思索や内省，読書などのための自室利用が増加するのは当然であると考えられる．したがって，単純に在室時間や行為数でひきこもりを定義した場合，こうした発達に伴う部屋の使い方の変化との区別が不鮮明にならざるをえない．もうひとつの問題は，竹下の捉え方では家族との交流への消極的態度が捉えられていないということである．すでに述べたように，子供は発達にしたがって個室での行為を増やし滞在時間も多くなる．しかしこれがそのまま家族との交流の拒否に結びつくものではないことは，多くの家庭で青年期に至っても家族との交流が問題となっていないことを考えれば容易に理解できる．

これに対して，ひきこもりを自室との関わり方と家族関係のあり方の両面で捉えるという定義に近い形で測定した研究もある．小林（1991）は発達にともなうひきこもりの変化を明らかにする研究の中で，個室と居間の両空間のしつらえへの子供の関与のパターンから空間利用を捉え，子供部屋の管理を子供自身がおこなうが居間のしつらえには関与しない場合をひきこもり（閉じこもり）としている．ただ，この研究では測定されている内容を考えると実際にはひきこもりというよりは関心の広がりが測定されているのであり，その意味ではひきこもりが直接測定されていないことに加えて，親による間接的な回答を用いているという限界がある．

このように，ひきこもりを自室への滞在の増加と家族との交流の減少の両面から捉えた場合，その実証的研究はこれまで必ずしも十分おこなわれていない．他方，従来の住居学，建築学あるいは環境心理学の所見や議論をみると，いくつかの住居・個室要因がひきこもりと関連する可能性が考えられる．

まずひきこもりを発生あるいは促進させる条件として住居・個室要因を考えた場合，家族空間などの自室以外の空間の魅力度を低下させることでひきこもりを発生・促進する場合と逆に自室の魅力度を高めることでひきこもりを発生・促進させる場合が考えられる．前者の，自室以外の空間の魅力度を低める要因としては一部屋当たりの家族数などで捉えられる居住密度がある．すなわち，過密空間に関する従来の環境心理学的研究によれば，高い居住密度の環境では他者（家族）との不必要な接触や干渉が増加し（*e.g.*, McCarthy and Saegert 1978)，他者や同室者を避ける傾向を強めることが示されている（Baron *et al.* 1976；Baum and Valins 1977)．したがって家族との不必要な接触をもたらす高い居住密度はひきこもりと正の相関があると推測される．他方，後者の自室の魅力度を高める要因としてはまず，自室と団らん空間の高い隔離度と自室の鍵の設置が挙げられよう．というのはこれらは排他性やプライバシーの確保を容易にすると考えられるからである．あるいはテレビやパソコンなど自室にある機器の数が多い場合も部屋の娯楽性を高め，魅力度を高めることが推測される．部屋の広さについても，多くの子供が6畳以上の広さを希望するように（沖田と武田 1977)，ある程度の広さの自室は部屋の評価を高め，魅力度を高めると考えられる．そして当然のことながら，自室に対する高い評価は部屋の魅力度と結びついていると考えられる．いずれにしてもこれら高い部屋の魅力度と結びつく要因はひきこもりと正の相関を示すと考えられる．

以上の住居・個室要因の他に，玄関から自室に行くまでの構造も関係する可能性が考えられる．なぜなら清家（1984）や戸谷（1991）は，自室に行く途中で家族空間と接する構造になっていることが家族とのコミュニケーションの維持に重要であると述べているからである．確かにここではひきこもりではなく家族とのコミュニケーションが議論されているのであるが，ひきこもりと家族との接触の関係を考えるなら，こうした主張に基づいて直接自室に行ける構造ほどひきこもりを生じやすいと推測することも可能である．したがって，自室までの構造についてもひきこもりとの関連を検討することは意味があろう．

このようにいくつかの住居・個室要因がひきこもりの発生や促進に関与することが推測されるが，加えて個人の人格特性などの心理要因が関与する可能性も考えられる．たとえば，臨床心理学や精神医学の所見は，ひきこもりと密接に関連すると思われる意欲減退傾向がしばしば同一性の未確立を原因とすることを指摘している（稲村 1989；鉄島 1993)．この場合は不適応症状としての強度のひきこもりが問題となっているのであるが，そこに至らない段階でも同一性の未確立な

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

者ほどひきこもる傾向が強い可能性は十分考えられる．他方，個室はなわばりのひとつと見なしうる（Altman 1975）．このなわばり行動とひきこもりについては，なわばり制が他者との交流と必ずしも対立するものではないことを考えると（Edney 1975；Brown 1987；小林 1992），ひきこもりとは直接的な関連はないと思われる．しかし，なわばりのひとつの指標である自己表出化（personalization）は，それが自立性や自己同一性との正の関連が推測されるため（Becker and Coniglio 1975； Omata 1995 a；小俣 1997），ひきこもりとの間では負の相関関係が得られる可能性が考えられる．逆に，もうひとつのなわばり行動である排他的態度では，排他性もひきこもりも他者を拒絶するという共通性があることから，逆に正の相関関係を推測することも可能である．いずれにしても個人のなわばり傾向は複数の側面からなっていることから，個々の側面がひきこもりと促進，抑制の関係をもっている可能性は十分ある．

以上みてきたように，自室へのひきこもりにはいくつかの住居・個室要因と心理的要因が関与すると考えられるが，その実証的検討はほとんどおこなわれていない．したがって，本研究では自室への滞在と家族との交流の両面から捉えたひきこもりについて，専用個室をもつ大学生を対象に，それに関与する住居・個室要因と心理的要因を明らかにすることで，専用子供部屋のあり方についての実証的資料を提供することを目的とした．その際，大学生を用いたのは，この時期では思春期の一過的な自室での滞在時間の増加という時期を過ぎ，関心が自室空間から家族空間に再度拡大する時期に当たるため（浅見 1976；小林 1991），引き続きこの時期にもひきこもりが見られたなら，それは子供部屋の議論で問題となっていた空間の非社会的利用という特徴をより明確に示すと思われたためである．

2. 方　法

(1) 被調査者

被調査者は愛知県内および岡山県内の大学・短期大学の1・2年に在学する自宅通学生302名であるが，ここでの分析対象となったのは専用個室をもつ者268名（男子134名，女子134名）である．平均年齢は男子が18.7歳（SD＝0.901），女子が18.6歳（SD＝0.744）であった．専用個室の保有時期は，男子が平均11.6歳（SD＝3.199），女子が平均10.2歳（SD＝3.188）で，女子の方が早かった（t＝3.57，df＝261，p＜0.005）．また，分析対象となった被調査者の住居条件をみると，一戸建てが90.3%，集合住宅が9.7%であり，部屋数（台所，玄関，浴室等は除く）は平均7.06室（SD＝2.362）であった．平均同居家族数（本人を含む）は4.6人（SD＝1.180）で，父親または主たる収入の稼ぎ手の職業では，自営業が26.3%，会社員が64.8%，公務員が7.5%，教員が2.2%，医師などその他が1.8%であった．

(2) 研究方法と調査内容

調査は講義中にアンケート調査用紙を配布し，その場で回答，回収する方法をとった．質問では上記の個人属性，住居，家族に関する質問に加えて以下の項目を尋ねた．

住居・個室の条件に関する質問は次の項目である．専用個室の有無（共用の場合は相手の性と年齢），初めて共用・専用それぞれの個室を与えられた年齢，部屋の広さ，個室の鍵の有無，玄関から自室までの構造（玄関から自室までに別の部屋を通過するか否か），自室と団らんの場との隔離度（ドアや襖でつながっていて，そこはいつも開いている～離れのように別棟になっている），自室にある機器（テレビ，ステレオ，パソコン・ワープロ，電話）の数および自室の評価（好き（5）～嫌い（1）の5段階評価）である．

所有者の心理的要因には次の3項目がある．そのうち二つはなわばり的態度を示す排他的態度と自己表出的態度である．排他的態度はOmata（1995 a）にならい，不在時，考えごとの最中，好きなことに没頭している時，勉強している時の4場面で他者が無断で入室してきたのに対しどのような態度（3段階）をとるかで評価し，その合計で排他的態度とした．自己表出的態度は14種類の部屋の装飾行為（ポスターを貼る，写真を飾るなど）のうち，自室を自分らしくするために行っている行為の数を調べ，その数で表した．自己同一性確立度はエリクソン心理社会的段階目録の改訂版（中西等 1985）のうちの「同一性」を測定した12の質問項目を用いた．これは逆転項目を修正し総得点を算出すると，高得点ほど自己同一性の確立度が高いことを意味する．

自室へのひきこもり傾向については9場面でのひきこもり傾向に関する質問（表1参照）で調べた．評価は5段階評価（いつもそうである～まったくない）で，逆転項目を修正し総得点を算出すると，高得点ほどひきこもり傾向が高いことを意味する．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

3. 結　　果

(1)　ひきこもり傾向

まず表1に九つの場面でのひきこもり傾向に関する評定値を男女別に示した．いずれの項目でも平均値は2.0前後であることから，全体としてはひきこもり傾向はあまり高くないことが窺える．しかし，2，3，5，6の4項目の場面では男子の方が有意にひきこもる傾向が強かった（いずれも t 検定で $p<0.05$，$p<0.005$，$p<0.05$，$p<0.005$ 水準で有意）．

次に，これらのひきこもり傾向を単一のカテゴリーにまとめることの妥当性を調べるため，因子分析（主因子解）による検討をおこなった．その結果，すべての項目で第一因子に0.300以上の因子負荷量が示されたこと，相関行列の固有値をみると第一因子は2.659であるがそれ以外では値が極端に小さくなることから（0.274以下），単一の因子構造とみなしても妥当であると解釈された（田中等 1984；南風原 1992）．なお，さらにバリマックス回転による下位因子への分類の可能性を検討したが，因子間で項目の重複が多く明確な分離ができなかった．したがって，これ以降では9項目の評定値を合計した得点（総ひきこもり傾向）について分析することとした．なおこの総ひきこもり傾向でも男子の方が女子よりも有意に高かった（表2，$t=3.36$，$df=266$，$p<0.005$）

表1．各ひきこもり傾向の平均評定値（SD）と性差

1. 家に客がいるときは必要があっても部屋から出ない		
	男子（$N=134$）	2.8 (1.136)
	女子（$N=134$）	2.7 (1.096)
2. (#) 勉強などしていても，一息いれてお茶などを飲むときはキッチンや居間に行く		
	男子（$N=134$）	1.9 (1.057) *
	女子（$N=134$）	1.6 (0.898)
3. (#) ほかの家族が団らんしているときは自分も加わる		
	男子（$N=134$）	2.9 (0.997) ***
	女子（$N=134$）	2.4 (0.944)
4. 夕食を食べ終わったらすぐに自分の部屋に行く		
	男子（$N=134$）	2.9 (1.065)
	女子（$N=134$）	2.7 (1.051)
5. 休日などをほとんど一日中自分の部屋で過ごす		
	男子（$N=134$）	2.4 (1.021) *
	女子（$N=134$）	2.1 (0.962)
6. (#) 暇な時間はたいていほかの家族と一緒にいるか，団らんの場所ですごす		
	男子（$N=134$）	3.2 (0.935) ***
	女子（$N=134$）	2.6 (1.086)
7. 自分の部屋にいて家族が自分を呼ぶのに気がつかない		
	男子（$N=134$）	2.1 (0.919)
	女子（$N=134$）	2.0 (0.849)
8. 必要がなければ自分の部屋から出たくないと思う		
	男子（$N=134$）	2.4 (1.072)
	女子（$N=134$）	2.2 (1.100)
9. できれば自分の部屋には鍵をかけておきたいと思う		
	男子（$N=134$）	2.5 (1.261)
	女子（$N=134$）	2.4 (1.253)

評定値：高得点（5）が高いひきこもり傾向を示す．(#)：逆転項目．評定値は逆転したものを表示．有意性の水準：* $p<0.05$，** $p<0.01$，*** $p<0.005$

(2)　住居・個室条件

表2に住居・個室条件の結果を男女別に示した．

まず居住密度であるが，それを一部屋当たりの家族数でみてみると，男女ともさほど密度は高くなかったが，男子の被調査者の家庭の方が居住密度が高かった（$t=2.17$，$df=266$，$p<0.05$）．そして男女とも70%以上が家族の団らんの場とは別の階に自室をもっていた．玄関から自室までの構造でも，男女ともほとんどの被調査者（80%前後）で他の部屋を通過することなく自室に直接行くことができる構造となっていた．このように，子供部屋の構造は多くの家庭で空間的に独立した構造となっていた．自室の扉の鍵の有無については，ほとんどの被調査者で鍵が付いていなかったが，男女を比較すると鍵の付いている部屋の比率は男子の方が高かった（$\chi^2=3.988$，$df=1$，$p<0.05$）．部屋の広さは男子で平均6.7畳（4～12），女子で平均6.9畳（4.5～12）となっている．また，自室にあるパソコンなどの機器の数では男子の方が有意に多くの機器を所有していた（$t=3.73$，$df=266$，$p<0.005$）．ちなみに，ひとつでも持っている被調査者は男子で90.0%，女子で82.1%で，ほとんどの被調査者が何らかの機器を自室にもっていることがわかる．個々の機器の所有率をみてみると，テレビの所有率は男子が55%，女子が18%（$\chi^2=39.17$，$df=1$，$p<0.005$），ステレオの所有率は男子が77%，女子が68%，パソコン・ワープロの所有率は男子が34%，女子は28%，そして電話の所有率は男子が18%，女子が24%であった．したがって，機器の所有での性差はテレビの有無の差とみなすことができる．自室の評価では，男女とも「どちらかといえば好き」に近い評定値を示し，

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

性差はなかった.

表2. 総ひきこもり傾向および住居・個室要因と心理要因の平均値と性差

変　数	平均（SD）	
総ひきこもり傾向		
9個のひきこもり評定値の合計		
男子（134）	23.0（5.560）***	
女子（134）	20.7（5.435）	
住居・個室要因		
居住密度		
男子（134）	0.73（0.243）*	
女子（134）	0.67（0.216）	
自室と団らん空間の隔離度		
	同じ階	別の階（含む：離れ）
男子（134）	40（29.9%）	94（70.1%）
女子（134）	36（26.9%）	98（73.1%）
玄関から自室までの構造		
	別の部屋を通過	直通
男子（134）	23（17.2%）	111（82.8%）
女子（134）	30（22.4%）	104（77.6%）
鍵の有無		
	あり	なし
男子（134）	19（14.2%）	115（85.8%）*
女子（134）	9（ 6.7%）	125（93.3%）
自室の広さ		
男子（132）	6.7（1.860）	
女子（134）	6.9（1.830）	
自室にある機器の数		
男子（134）	1.8（1.005）***	
女子（134）	1.4（0.995）	
自室の評価（好き＝5～嫌い＝1）		
男子（134）	3.6（0.779）	
女子（134）	3.7（0.889）	
心理要因		
自己同一性確立度		
男子（134）	38.1（6.642）	
女子（134）	38.0（5.692）	
なわばり的態度：自室での自己表出的行為数		
男子（134）	1.3（1.806）*	
女子（134）	1.7（2.216）	
排他的態度（強＝12～弱＝4）		
男子（134）	6.7（2.178）*	
女子（134）	7.2（2.344）	

有意性の水準：* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.005$.

(3) 心理的要因

同様に，表2に心理的要因の結果を示す.

まず，自室でのなわばり的態度をみてみると，排他的態度・自己表出的行為のいずれにおいても有意な性差がみられた．すなわち，排他的態度は男女ともあまり強くなかったが，男女を比較した場合，女子の方が男子よりも強かった（$t=2.02$, $df=266$, $p<0.05$）．自己表出的行為の内容は多様であるが，男子に比べて女子の方が有意に多い行為を行っていた（$t=2.02$, $df=266$, $p<0.05$）．このように，今回の調査では女子の方がなわばり的態度が強かった．自己同一性の確立度をみると男女とも平均評定値は38で，ほぼ中間的な得点となっている.

(4) 説明変数間の関連

従来の研究からはなわばり行動と自己同一性の間で関連性が得られる可能性が指摘されているが，統計的に有意な関係が得られたのは自己表出行為と自己同一性の間であった．自室を自己表現のために飾る行為を行為数にしたがって「なし」「1～2個」「3個以上」の3群に分け，自己同一性評定値×自己表出行為×性で分散分析（ANOVA）をおこなったところ，自己表出行為の主効果のみが有意であった（$F=4.305$, $df=2/262$, $p<0.05$）．そして「3以上」群の平均自己同一性評定値は39.7で，「1～2」群の36.7，「なし」群の37.6に比して有意に高かった（それぞれ $t=2.60$, $df=120$, $p<0.025$；$t=2.41$, $df=217$, $p<0.025$）.

以上，ひきこもり傾向，住居・個室条件および被調査者の心理的要因についてみてみたが，いくつかの項目で顕著な性差がみられた．したがって，総ひきこもり傾向と住居・個室条件，心理的要因の関係の分析にあたっては男女別に検討することとした.

分析にあたっては説明変数には名義尺度が含まれているため，居住密度，自室の広さ，自室の評価，排他的態度，自己表出的行為，自己同一性確立度についてもいくつかの段階にカテゴライズし，それらをもとに数量化Ⅰ類による分析を実施する方法を採った（駒澤 1982；小林 1984；田中等 1984）.

(5) 総ひきこもり傾向と住居・個室条件，心理的要因の関係

表3に数量化Ⅰ類による分析結果を示す.

まず，男子の結果をみてみる．表に示したように，重相関係数0.4759，決定係数0.2264が得られ，式の適合度については1％水準で有意な F 値が得られた．その意味で予測式としての妥当性は裏づけられた（小

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

表3．数量化Ⅰ類による総ひきこもり得点への住居・個室要因と心理要因の関与度の分析

男子の結果

アイテム	カテゴリー	カテゴリー数量	範囲	偏相関係数
居住密度	低（～0.50）	−1.120	3.654	0.248
（人数/部屋）	中（0.51～0.99）	−0.516		
	高（1.00～）	2.534		
自己同一性確立度	低（～34）	1.084	2.374	0.229
（得点）	中（35～39）	1.073		
	高（40～）	−1.290		
排他的態度	弱（4～6）	−1.062	2.295	0.221
（得点）	強（7～12）	1.233		
自室の機器	なし	−2.949	3.899	0.213
	1個	−0.620		
	2個	0.951		
	3個以上	0.336		
鍵の有無	なし	−0.351	2.473	0.168
	あり	2.122		
自室の広さ	6畳以下	−0.342	1.146	0.104
	6.1畳以上	0.804		
自室での自己表出	しない	−0.134	1.339	0.094
的行為数	1～2	0.863		
	3以上	−0.477		
自室の評価	低（1～3）	0.313	0.552	0.053
（得点）	高（4～5）	−0.239		
自室と団らんの場	同じ階	0.404	0.576	0.050
の隔離度	別の階	−0.172		
自室までの構造	別室通過	−0.172	0.208	0.015
	直通	0.036		

Constant term＝22.96，R＝0.4759，R^2＝0.2264．分散分析による式の適合度の評価：F＝3.517，df＝10/123，p＜0.01.

女子の結果

アイテム	カテゴリー	カテゴリー数量	範囲	偏相関係数
排他的態度	弱（4～6）	−2.320	3.935	0.381
（得点）	強（7～12）	1.615		
自室までの構造	別室通過	3.256	4.195	0.370
	直通	−0.939		
自己同一性確立度	低（～34）	1.704	3.799	0.336
（得点）	中（35～39）	0.682		
	高（40～）	−2.095		
居住密度	低（～0.50）	−1.554	2.198	0.216
（人数/部屋）	中（0.51～0.99）	0.644		
	高（1.00～）	0.596		
自室の機器	なし	−1.203	2.360	0.174
	1個	−0.190		
	2個	1.158		
	3個以上	−0.047		
自室と団らんの場	同じ階	−1.221	1.670	0.163
の隔離度	別の階	0.449		
自室の評価	低（1～3）	−0.863	1.428	0.146
（得点）	高（4～5）	0.565		
自室での自己表出	しない	−0.199	1.480	0.117
的行為	1～2	−0.790		
	3以上	0.690		
自室の広さ	6畳以下	0.114	0.311	0.034
	6.1畳以上	−0.197		
鍵の有無	なし	0.000	0.002	0.000
	あり	−0.002		

Constant term＝20.702，R＝0.6192，R^2＝0.3834．分散分析による式の適合度の評価：F＝7.648，df＝10/123，p＜0.01.

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

林 1984)．しかし，個々の説明変数をみると，偏相関係数が比較的高い（0.15 以上）説明変数は5項目であった．そのうちひきこもり傾向に最も関連性の強い条件は居住密度で，居住密度が高くなるほどひきこもり傾向も高くなるという関係がみられた．次いで高い偏相関係数が得られたのは自己同一性確立度で，自己同一性が確立されていない男子ほどひきこもるという関係がみられた．以下，排他的態度が強いほど，また自室の機器の数が多いほど，そして鍵があるほどひきこもり傾向が高まるという関係が得られた．

次に，女子の結果をみてみる．女子の場合でも重相関係数 0.6192，決定係数 0.3834 が得られ，式の適合度についても有意な F 値が得られている．そして個々の説明変数をみると，高い偏相関係数が得られたのは6説明変数であった．そのうち最も強い関連性がみられたのは排他的態度で，男子同様，排他的態度が強いほどひきこもる傾向が強いという関係がみられた．次いで高い偏相関係数が得られたのは自室までの構造で，自室に行くのに別の部屋を通過しなければならない構造で高いひきこもり傾向が得られるという関係がみられた．また男子と同様，自己同一性の確立度が低いほどひきこもり傾向が高くなるという関係がみられた．その他，居住密度でも男子と同様に，密度が高いほどひきこもり傾向が高まるという関係がみられた．しかし，自室の機器の数では，高い偏相関係数が得られたものの，ひきこもりとの関係は直線的ではなく，機器があまり多くなると逆にひきこもり傾向が弱まるという逆U字関数的な関係がみられた．そして，自室が家族の団らんの場と別の階にある条件でひきこもり傾向が高かった．

このようにひきこもり傾向に対して男女で共通する要因とそれぞれの性に特有な要因があることが示された．しかし，共通する要因でも偏相関係数をみると女子で比較的高い偏相関係数が得られ，しかも関連性のある変数も多かった．これらのことを考えると，女子の方がここで挙げた住居・個室条件や心理的要因に敏感であるのかもしれない．

(6) 総ひきこもり傾向に対する住居・個室条件と心理的要因の相互作用的関係

住居・個室条件および心理的要因とひきこもり傾向との関係は上述のとおりであったが，住居・個室条件と心理的要因との間に相互作用的関係が存在する可能性も考えられる．したがって，次に住居・個室条件と心理的要因の相互作用について要因間の分散分析をおこなった．

その結果有意な交互作用が得られたのは，男子の場合の「自室と団らんの場の隔離度」と「自己同一性確立度」の間のみであった（交互作用：$F=3.871$，$df=2/128$，$p<0.05$）．すなわち，自室と団らんの場が同じ階にあるときは自己同一性確立度による総ひきこもり傾向に差はない．しかし，自室と団らんの場が別の階にある場合には自己同一性確立度が高いほどひきこもり傾向は弱かった（自己同一性確立度が低い男子：総ひきこもり傾向＝24.0，自己同一性確立度が中間の男子：24.6，自己同一性確立度の高い男子：20.3）．

4. 討　論

以上みてきたように，本研究ではいくつかの住居・個室要因と心理的要因が青年期の自室へのひきこもり傾向と関連していることが示された．次にその結果と今後の課題について考察する．

本研究ではひきこもりを九つの場面で測定したが，男女とも全体としてはひきこもり傾向の得点があまり高くなかった．これは大学生の段階では個室の非社会的使用という意味でのひきこもりが少ないと解釈することもできる．とくに大学生では生活の中心が自室から団らん空間などに再度拡大する時期にあることが知られている（浅見 1976；小林 1991）．したがって，ここでの低い得点はこうした住空間行動の変化を反映したものとみなすこともできる．他方，本研究の質問の内容をみると，比較的極端なひきこもりを尋ねている．このことはとくに非逆転項目のうちの五つの質問（1，4，5，7，8）に当てはまると思われる．そのため，結果的に回答が「まったくない」という側に偏った可能性がある．このことを考えると，本研究の「どちらともいえない」あるいは「そういうことが多い」などの回答は実際にはそれ以上に強いひきこもり傾向を内包していると解釈できる可能性がある．

本研究での低いひきこもり得点が大学生の住空間行動の特徴によるのか質問方法によるのか，あるいはその両者によるのかはここでは結論できないが，本研究の結果は自室へのひきこもりという個室の非社会的利用がいくつかの住居および心理要因と強く関連していることを示している．同時に，そこには明確な性差もみられた．したがって，以下では性差を含めて論じることとする．

まず，総ひきこもり傾向についてみてみると，これは男性の方が女性に比して有意に強かった．これは一

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

見すると男子学生の方が自室に滞在する時間が短いという他の所見（浅見 1976；沖田と武田 1977）と矛盾するようにも見える．しかし，次のことを考えると必ずしも本結果が従来の滞在時間の結果と矛盾するものではないと思われる．すなわち，男子学生の方が短いという報告でも，自室以外の滞在場所として女子は居間や茶の間といった家族空間を挙げるが，男子ではそうしたことがない（浅見 1976）．これは男子ではもともと家族空間への参加が弱く，女子では自室と家族空間の双方を生活の場とする傾向が強いことを示すと考えられる．そうであれば，ひきこもりの定義に家族空間への不参加を加えた本研究で男子の方がひきこもり傾向が強いという結果が得られるのは理解できよう．

次に本研究では個々の要因とひきこもり傾向の関係について仮説的関係を仮定したが，それについて考察する．

まず居住密度の場合，高い居住密度はひきこもりと正の相関関係があると仮定したが，結果は男女ともそれを支持するものであった．そして青年期がプライバシーなどに敏感な時期であることを考えると，この関係には，緒言で述べたような過密による他者（家族）との不必要な接触や干渉の増加が重要な要因として関わっていると考えられる．

自室と団らん空間の隔離度では隔離度が高いほどひきこもりが強まるという関係は一義的にはみられなかった．すなわち，女子学生では別の階になるほどひきこもり傾向が強まるという仮定された結果が得られたが，男子学生では自我の確立度と関連して総ひきこもり傾向との関係が認められた．男子の場合，自室と団らんの場が同じ階にあるときは自己同一性確立度によるひきこもり傾向に差はないが，自室と団らんの場が別の階にある場合には自己同一性確立度が高い方がひきこもり傾向は弱いというものであった．この性差と男子にみられた相互作用の解釈は現時点では不可能であるが，プライバシー確保のために求める空間の物理的条件についての性差の検討などが必要であろう．

玄関から自室までの構造については従来，直接自室に行ける構造では家族とのコミュニケーションが低下する可能性が指摘され（清家 1984；戸谷 1991），ひきこもりについても同様の関係がみられるのではないかと推測した．しかし結果は，男子学生ではこの要因は総ひきこもり傾向とは関連性がなく，女子学生では逆に，何らかの部屋を通過する構造で総ひきこもり傾向が強いというものであった．この女子学生の結果は，プライバシーに対しては女子の方が敏感であるという所見（Parke and Sawin 1979）を考えると理解できる．すなわち，他の部屋の通過は不必要な他者との接触を余儀なくされ，それが自身の行動が観察されているという印象を生みだすため，一度部屋に入ったならあまり出ないという行動を女子にとらせているのかもしれない．この本研究の所見と従来の建築家による意見との関係では，家族のコミュニケーションを問題にするかひきこもりを問題とするかという違いがあるが，ひきこもりもコミュニケーションを減ずることを考えると，従来の建築家の主張についても実証的な検討が必要であることを本結果は示しているといえよう．また，これに関連して友田（1994）は子供部屋へ直接行ける「公私分離型」は長子が中学生以上の家庭に適し，居間を挟む「Lホール型」は長子が小学生以下の家庭に適していると述べ，発達にともなう最適な構造の違いを指摘している．本研究の所見も被調査者の年齢を考えるとこの主張に沿うものといえるかもしれない．とすれば，住まいの構造とひきこもりの関係についても所有者の年齢を考慮に入れた検討が今後，必要であろう．

個室の鍵については，鍵の存在がひきこもりと正の相関にあると仮定したが，基本的に鍵をつけている部屋が少なかった．これは子供部屋の鍵についての従来の報告（浅見 1976；中島 1986；北浦 1989）と一致する．しかし，男子に鍵付きの部屋が多いという結果は今回のみ得られたものである（北浦 1989）．この違いが被調査者の年齢によるのか，その他の要因によるのかは現時点では結論できない．他方，ひきこもり傾向との関連では，男子で，鍵がある条件でひきこもりが強いという，当初の予想と一致する結果が得られた．ただ鍵のあるサンプル数自体が少数であり，この結果がどの程度一般化できるかということは今後検討する必要があろう．同様に，女子で同様の結果が得られなかったが，これが女子には両者に関連がないためか，女子では鍵付きの部屋が少なかったという統計的な条件によるのかという問題，あるいは鍵の存在とひきこもり傾向の因果関係は必ずしも明らかではないことなども（渡辺 1986），今後の検討課題である．

自室の機器とひきこもり傾向との関連は男女両性で得られたが，その内容には違いがみられた．まず，男子では機器の増加はひきこもり傾向の上昇と結びつくという，予想どおりの結果であった．そして女子に比して男子にテレビ保有者が多かったことを考えると，

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

機器の増加が部屋での娯楽性の上昇を意味し，それがひきこもりをもたらしたと解釈できる．それに対して女子の場合は機器の数とひきこもりの関係は逆U字関係であった．この解釈は今回の結果のみでは難しく，現時点ではこの傾向がどの程度一般的なものかを確認する必要があると述べるにとどめておく．

このほか，自室の広さについてはひきこもりとの間に仮定された関連はみられなかった．同様に自室の評価とひきこもりとの間にも関連性をみいだせなかった．前者については，同年齢の青年は比較的部屋の広さに満足していること（Omata 1995 a）を考えると，この年齢の青年にとっては広さの要因はあまり重要ではないことを意味しているのかもしれない．

次に，自己同一性の確立度について考察する．これについては低い自己同一性は他者との交流の拒否などの非社会性傾向をもたらし（Erikson 1959；馬場 1976），結果的にひきこもり傾向を強めると予測された．結果は男女とも自己同一性の確立度はかなり強くひきこもりと関連し，低い同一性の者ほどひきこもるというものであった．その意味では，自己同一性は不適応症状を示していない学生においてもひきこもりの主要な要因となりうるといえよう．

なわばり的態度では，排他的態度が男女ともひきこもり傾向と密接に関連していた．それに対して自室での自己表出行為は総ひきこもり傾向と関連がなかった．これは，ヒトのなわばり制の機能を排他機能に限定しない立場からすれば予想どおりの結果である．他方，自己表出行為が心理的自立や自己同一性と密接に関連するという主張（*e.g.*, Becker and Coniglio 1975；Brown 1987；小俣 1997）からすると予想に反した結果である．とくに今回の結果でも自己表出行為は自己同一性と関連していたことを考えると，本結果は自己表出行為に表れたヒトのなわばり制がひきこもりとは関連しないことを強く示すものといえよう．ただ次のような問題は残されている．すなわち自己表出性の測度の妥当性の問題である．今回は「自分らしくするための行為の有無」で測定したが，自己表出の手段としての有効性は行為によって異なる可能性がある．したがって，自己表出性と装飾行為との関連を吟味してより妥当性を高めたなら，予想された関連性が得られる可能性は残されている．さらにこの妥当性については，一般に女子学生の方が部屋を飾る行為が多いこと（浅見 1976；Schiavo 1987）を考え併せると，行為数を測度とした場合ではなわばり制以外の要因が関与する可能性も否定できない．いずれにしても，自己表出性の妥当な測度の選定がこの問題の解決には不可欠であり，今後の課題といえよう．

最後に，本研究での重相関係数や決定係数，偏相関係数の数値はひきこもり傾向と住居・個室要因，心理要因との関連は女子で強いことを示唆している．この性差は日常生活あるいは家庭生活における個室の重要性の性差を表している可能性が考えられる．すなわち，先に述べたように，プライバシーについては女子の方が敏感であること，滞在時間が女子の方が長いという所見があること，個室の装飾も女子の方が多いことなど，自室との関わり方は女子の方が強いことを窺わせる所見は多い．したがって女子の方が個室の条件に敏感である可能性が考えられる．しかし，部屋の開放度は男子の方が高い（中島 1986）など，部屋の使い方の性差は多様である．したがって，この解釈は今後更に検討する必要があろう．

最後に，本研究では触れることのできなかった問題について今後の課題として述べておく．ひとつはひきこもりの因果関係の解明に関する問題である．本研究はひきこもりに種々の要因が関与することを明らかにしたが，厳密にいえば，それらの要因間の関係，たとえばそのうちのどれが主要な要因で，どれがある要因の影響を強化する拡大要因かなどについては明らかにしていない．これは本研究がまず，ひきこもりに関与する要因の特定に主たる目的があったためであるが，こうした問題はひきこもりの発生機序の解明に不可欠であり，今後検討する必要があろう．ふたつめはひきこもりに関与する他の要因の可能性である．たとえば本研究で扱わなかった，ひきこもりに関与する可能性の高い要因に家族関係がある．ひきこもり自体が家族との交流に対する消極的態度を含むものであることを考えると，何らかの家族関係上の問題の存在はひきこもりを発生，促進する可能性は十分ある．本研究では主たる問題を居住環境に置いたため，それ以外では最も議論されている心理的要因のみを検討したが，ひきこもりの全体的な解明のためには他の要因の検討が不可欠であることはいうまでもない．

以上，本研究の結果は子供部屋へのひきこもりには住居・個室の条件，心理的要因が関与していることを明らかにした．その意味では，北浦等（1985）の指摘した，子供部屋論議における実証的検証の重要性を再確認したものといえよう．しかし同時に，未解明の問題も多く残されている．青年期には子供部屋はほとん

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

どの子供が保有している実状を考えると，議論の活発さと実証的検証の不足のギャップを埋める作業は今後さらに重要性が増すと思われる．

5. まとめ

本研究は議論の活発さに比して実証的研究の少なかった専用子供室の構造および心理的要因とひきこもりとの関連について，大学・短大の1，2年生を対象にアンケート調査を実施し，子供部屋のあり方についての実証的資料を提供することを目的とした．その際，ひきこもりを自室での滞在傾向と家族との交流への消極的態度として捉えることとした．結果は，全体としてはひきこもり傾向はあまり強くなかったが，いくつかの住居・個室条件と心理的要因がひきこもりに関連することが示され，同時に性差の存在することも示された．

男子では住居・個室条件のうち居住密度，自室の機器の数，鍵の有無が，また心理的要因では自己同一性の確立度と排他的態度がひきこもり傾向と関連していることが明らかとなった．他方女子では，住居・個室条件のうち玄関から自室までの構造，居住密度，自室の機器の数，自室と家族空間の隔離度が，また心理的要因のうち自己同一性確立度と排他的態度がひきこもりと関連していることが示された．そして，全体としては女子の方がこうした要因とひきこもりとの関連が強いことが明らかとなった．

以上の結果は，子供部屋の問題について実証的資料に裏づけられた議論の必要性を強く示すものといえる．

本研究でのデータの収集にあたり，吉備国際大学三宅俊治教授，椙山女学園大学谷口俊治助教授，名古屋市立看護短期大学小笠原昭彦助教授のご協力を戴きました．記して謝意を表します．

引用文献

Altman, I. (1975) *Environment and Social Behavior: Privacy, Personal Space, Territory and Crowding*, Brooks/Cole, Monterey, CA

浅見雅子（1976）青年の生活空間としての個室について（第1報）．所有と使用の実態，家政誌，**27**，62-67

馬場謙一（1976）自我同一性の形成と危機—E.H.エリクソンの青年期論をめぐって，『青年の精神病理』（笠原　嘉，清水将之，伊藤克彦編），弘文堂，東京

Baron, R.M., Mandel, D.R., Adams, C.A., and Griffen, L.M. (1976) Effects of Social Density in University Residential Environments, *J. Personal. Social Psychol.*, **34**, 434-446

Baum, A., and Valins, S. (1977) *Architecture and Social Behavior: Psychological Studies of Social Density*, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ

Becker, F.D., and Coniglio, C. (1975) Environmental Messages: Personalization and Territory, *Humanitas*, **11**, 55-74

Brown, B.B. (1987) Territoriality, in *Handbook of Environmental Psychology* (ed. by Stokols, D. and Altman, I.), John Wiley and Sons, New York, NY

Edney, J.J. (1975) Human Territoriality, *Psychol. Bull.*, **81**, 959-975

Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*, International University Press, New York, NY（小此木啓吾訳編（1973）『自我同一性』，誠信書房，東京）

南風原朝和（1992）知能検査の因子構造をさぐる—因子分析，『心理・教育のための多変量解析法入門：事例編』（渡辺　洋編），福村出版，東京

羽仁節子（編）（1980）『子ども白書・1980年版』，草土文化，東京

Hildreth, G.J., and Hoyt, C.D. (1981) Children and Privacy: Implications for Parents and Teachers, *J. Home Econ.*, **73**, 31-32

稲村　博（1989）『若者・アパシーの時代』，日本放送出版協会，東京

北浦かほる（1970）住空間における子供の占める位置，大阪市大家政学部紀要，**18**，101-125

北浦かほる（1989）『子供の個室保有が自立の発達と家族生活に及ぼす影響（1）—日米比較研究の予備的研究—』，住宅総合研究財団，東京

北浦かほる，加納知代子，河合邦子，堀田由美，山本聡美（1985）成長過程において個室の専有度が子供の自立に及ぼす影響—子供室に関する考察—，大阪市大生活科学部紀要，**33**，83-99

小林秀樹（1991）住居における子供の生活領域についての基礎的検討—住様式の領域論的研究・その4—，日本建築学会大会学術講演梗概集（東北），E，153-154

小林秀樹（1992）『集住のなわばり学』，彰国社，東京

小林竜一（1984）『パソコンによる多変量解析』，培風館，東京

駒澤　勉（1982）『数量化理論とデータ処理』，朝倉書店，東京

McCarthy D., and Saegert, S. (1978) Residential Density, Social Overload, and Social Withdrawal, *Human Ecol.*, **6**, 253-272

宮脇　壇（1982）『子どもに個室はいらない：新3 LDKの家族学』，グロビュー社，東京

中島喜代子（1986）子供部屋に関する研究（第1報）．年齢段階別にみた子供部屋の実態と子供部屋に対する親子の志向，家政誌，**37**，1085-1094

中西信夫，水野正憲，古市裕一，佐方哲彦（1985）『アイデンティティの心理学』，有斐閣，東京

沖田富美子，武田満す（1977）公団住宅における部屋の使われ方（第3報）．子供の生活との対応，家政誌，**28**，58-66

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

Omata, K. (1992) Spatial Organization of Activities of Japanese Families, *J. Environ. Psychol.*, **12**, 259-267

小俣謙二（1995）青年期における個室の心理的意義に関する研究，名古屋文理短大紀要，**20**，11-18

Omata, K. (1995a) Territoriality in Bedroom and Its Relations to the Use of Room and Psychological Independence in Japanese Adlescents, *J. Home Econ. Jpn.*, **46**, 775-781

Omata, K. (1995b) Territoriality in the House and Its Relationship to the Use of Rooms and the Psychological Well-Being of Japanese Married Women, *J. Environ. Psychol.*, **15**, 147-154

小俣謙二（1997）『住まいとこころの健康：環境心理学からみた住み方の工夫』，ブレーン出版，東京

Parke, R.D., and Sawin, D.B. (1979) Children's Privacy in the Home: Developmental, Ecological, and Child-Rearing Determinants, *Environ. Behav.*, **11**, 87-104

Schiavo, R.S. (1987) Home Use and Evaluation by Suburban Youth: Gender Differences, *Children's Environ. Q.*, **4**, 8-12

清家　清（1984）『やすらぎの住居学—100の発想—』，情報センター，東京

清家　清（1989）『ほんもの住居学—家族のための住まいの知恵100—』，情報センター，東京

竹下輝和（1986）個室成立以後の家族コミュニティに関する実証的研究（梗概）—その1．子ども部屋のプライベイティズム化現象についての住文化論的考察—，住宅研究所報，105-114

田中　豊，垂水共之，脇本和昌（1984）『パソコン統計解析ハンドブック：II多変量解析編』，共立出版，東京

鉄島清毅（1993）大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—，教育心理学研究，**41**，200-208

友田博通（1994）『心の住む家—家とインテリアの心理学』，理工図書，東京

戸谷英世（1991）『アメリカの家日本の家』，井上書院，東京

外山知徳（編）（1985 a）『現代のエスプリ210，子ども部屋』，至文堂，東京

外山知徳（1985 b）『住まいの家族学』，丸善出版，東京

外山知徳（1989）住まいと子供—住まいと家族④—，『新・住居学—生活視点からの9章—』（渡辺光雄，高阪謙次編），ミネルヴァ書房，東京

山本厚生，中島明子（編）（1985）『家族と住まい：新・住宅設計論』，ドメス出版，東京

渡辺武信（1986）子供部屋は要らないのか，『現代家相学』（日本建築学会編），彰国社，東京

NII-Electronic Library Service